海外子女教育だより

気　球　船

第２１７号
平成20年1月
文部科学省
初等中等教育局
国際教育課
編集・発行
初版発行昭和62年12月

海外子女教育総合HP: http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/main7_a2.htm

世界の窓

国際交流ディレクターの果たしてきた使命と今後の発展への思い

ナイロビ日本人学校国際交流ディレクター
菊池　弥生

■ナイロビ日本人学校へ

平成 17 年、文部科学省から国際交流ディレクターとしてナイロビ日本人学校に派遣されました。国際交流ディレクターとして派遣される任期は 3 年間です。ナイロビ日本人学校にふさわしい国際理解教育や現地理解教育を立案し、国際委員会を中心に実践を進めてきました。

ナイロビ日本人学校の国際理解教育の基本方針は、「学校間交流」と「現地理解教育」です。国際交流ディレクターの仕事の第一は、国際理解教育推進の「橋渡し」の役割だと考えています。教員は授業や校務分掌に一生懸命に取り組んでいますので、それを側面から支援するのが私の仕事であり、いつも新しい教育施設や教材など、先生方にケニアの教育における最新情報を提供し、助言をしてきました。

保護者や日本人会の方々などに対しては、学校支援のガイドラインを作成し、外部講師・学校支援アドバイザー・学校支援ボランティアを募集したり、学校施設開放をするなど、日本人学校を親しみのある存在として理解していただけるように努力してきました。

■学校間交流について

「学校間交流」では、ケニアの公立校、インターナショナル校（イギリス式・アメリカ式)、英語を第二外国語とする外国人学校（スウェーデン、フランス、オランダ、ドイツ）との交流活動をしています。国際色豊かな活動を通して、お互いの文化を理解し、英語によるコミュニケーション能力を培う場を提供することが目的です。しかし、当初、子どもたちは、学校間交流には積極的ではありませんでしたし、保護者からも協力的な意見が少ない状況でした。しかし、現在では、「英語で話したい。友達を見つけたい。国際交流は楽しい。」と子どもたちの感想や態度が変化し、大きく進歩できたと私なりに自負しているところです。

（現地校キリマニ校の子どもたち）

現地校のキリマニ校とは、1981 年より、運動会や学習発表会で 26 年間も交流を継続しています。昨年、中学生は算数と理科の授業を体験学習しました。外国人学校とは、各国の文化や伝統的な遊びの紹介をし、他国の文化を尊重し、自国の文化も大切にする態度の育成を目指しています。インターナショナル・スクール・オブ・ケニア（ISK)との交流の受け入れでは、日本文化の発信として、和太鼓を演奏し、「折り紙」「書道」「和太鼓」「日本の遊び」などのワークショップを開催しています。中学生は英語で説明するリーダー役をつとめ、小学生は自分の知っている英語を駆使し、身振り手振りで日本文化を教えることができるようになってきました。低学年部は、隣接校のナイロビ・アカデミーと「七夕集会」を実施し、日本の伝統的な文化を理解するようにしています。

（インターナショナル校の子どもたちと　カルチャーデイ）

■現地理解教育について

「現地理解教育」では、主に総合的な学習の時間を活用し、校外学習など他教科とも関連させた年間計画を立てています。まず、「アフリカ学習」では、ケニアの自然遺産や文化遺産の保護を目的とし、ケニアなどアフリカの国々について研究をしている大学の研究者や専門家に外部講師としてお招きしました。これらは3年間で12回の開催となりました。人類の進化、化石の発掘、遊牧民の生活、ケニア人の知恵、野生動物や昆虫、音楽とダンス、地球の誕生など多岐にわたります。ケニアは人類発祥の地として世界的に有名であり、また、野生動物の国としても憧れの場所です。将来、アフリカに関する研究をする子どもが一人でも出てきて欲しいと願っています。

今年度は、ケニアの公用語であるスワヒリ語の講座も担当し、言語の大切さと面白さを分かりやく説明できたと思います。イングリッシュの時間にもサポートとして入っており、子どもたちの英語力を把握できていたことは、国際交流を実施する際に役立ちました。

社会科の副読本として、「カティカ・ケニア」を作成しました。社会科や総合的な学習の時間の際、事前学習および事後学習の資料として活用されています。例えば、ナイロビにはアフリカ（発展途上国）で唯一の国連本部がありますが、その国連環境計画（UNEP）を見学する時などや工場見学をする時などに使用しています。

環境教育学習においては、ワンガリ・マータイ教授との植樹祭参加を企画・実施しました。ノーベル平和賞を受賞したマータイ教授と一緒に植樹をすることにより、世界的な課題となっている自然保護と森林の果たす重要性を体験学習しました。また、ノーベル平和賞の意義なども学習させ、ケニアだけではなく世界に目を向けるように広い視野で指導をしています。

（マータイ教授と子どもたち　植樹祭）

■国際交流ディレクターの仕事を終えるに当たって

私は国語と書道の教員免許状を持っていますので、書写の授業を手伝いました。これが国際交流ディレクターとして違和感なく教員や保護者から認められ、また、子どもたちの名前や性格をすぐに覚えることに役立ちました。これが自然な形で子どもたちに溶け込んでいくことができた秘訣だったと思います。

国際交流ディレクターとは、多忙な先生方の一歩前を進みながら、国際交流のあり方を子どもたちに仕掛け、表舞台の監督ではなく、黒子的な立場で支えていく地道な仕事だと理解しています。ナイロビらしい国際交流の方法が確立されてきましたので、これらを次の派遣教員の先生方に引き継いでいくことが大切な最後の仕事だと考えています。

現在のケニアは、昨年12月27日の大統領選挙の結果を巡り、非常に治安状態が悪くなっています。投票結果に不正があったということから、全国的な民族闘争に発展してしまったのです。元国連事務総長のアナン氏などが調停をしていますが、今のところ解決の糸口が見つかっていません。日本人学校も休校、スクールバス発着場所の変更、長期の自宅待機など、精神的に不安定な毎日が続いて

います。しかし、これもケニアの現実の姿です。平和について、アフリカの民族について、また、ヨーロッパの植民地支配の歴史的な背景などについて学習することも現地理解教育の一環だと考えています。子どもたちには、ケニアは暴動や虐殺などがあって恐い国だと感じさせるのではなく、より民主的な国になるための過程であり、その時に自分がケニアという国にいたこと、人類のふるさとの国で生活したことが良かったと思えるようにしたいと試行錯誤しているところです。

このケニアでの取り組みがアフリカはじめ世界の国際交流の発展に少しでも寄与できたら幸いと思います。文化・科学・産業・スポーツ・政治などいろいろな分野で国際交流が大きく進んでいる現在、国際交流の推進、国際理解教育が益々充実することを願っていますし、私も立場は変わっても、何かで貢献していきたいと考えています。私を支えてくださった多くの皆様方に心からお礼を申し上げます。

トピックス

平成２０年度
国際教育課関連予算について

庶務・助成係長　荒井　忠行

平成20年度政府予算については、「経済財政改革の基本方針2007」(19.6.19閣議決定)を踏まえ、歳出全般にわたる徹底した見直しを行うこととされました。

当課事業の平成20年度予算額(案)についても、226億6,800万円(対前年度比2.1％減)と非常に厳しい結果になりました。

予算額(案)の主な内容は次のとおりです。詳細につきましては、巻末の予算額(案)一覧を御参照ください。

①海外子女教育

221億1,800万円(対前年度比0.5％減)

平成20年4月開校予定の日本人学校2校(杭州・深せん　いずれも中国)に係る派遣教員の予算が認められる。

また、国際交流ディレクターについては(19年度)10人→(20年度)7人に減。

これら、在外教育施設への教員等の派遣にかかる経費として216億5,600万円を計上(対前年度比0.3％減)。

他に、海外子女教育推進体制の整備、海外子女教育活動の助成(在外教育施設教材整備事業補助等)、在外日本人子女用教科書の買上げ。

②帰国・外国人児童生徒等教育

2億5,900万円(対前年度比30.8％増)

「帰国・外国人児童生徒受入促進事業」を拡充し、新たに、就学前の児童を指導するための初期指導教室の実施や、外国語の分かる人材の配置にかかる経費として、2億2,300万円を計上(対前年度比42.0％増)。

他に、JSLカリキュラム実践支援事業。

③国際理解教育

2億9,100万円（対前年度比60.1％減）

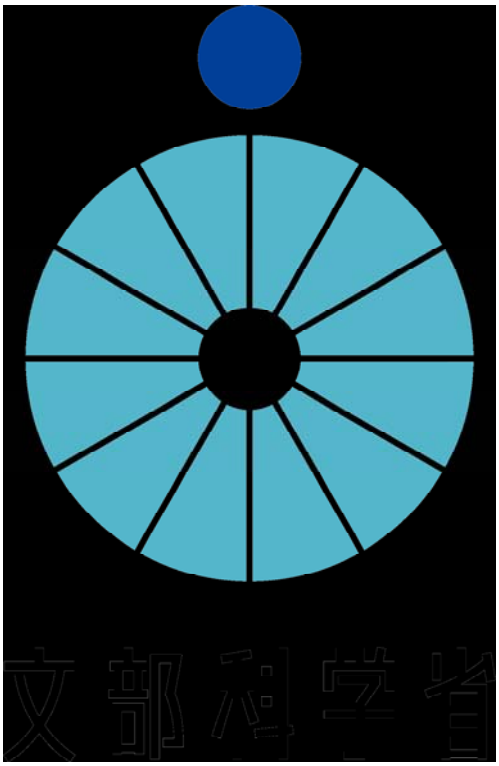
小学校における英語活動の必修化に際して必要となる、教員研修用の資料等にかかる経費として、3,200万円を計上（対前年度比14.3％増）。

他に、国際教育の推進、国際交流の推進等。

「文部科学省シンボルマーク」を新たに制定

大臣官房総務課広報室

文部科学省では、その担う役割や任務に取り組む姿勢について、国民の皆様により一層ご理解いただくことを目指し、「文部科学省シンボルマーク」を新たに制定しました。制作者は、グラフィックデザイナーの勝井三雄氏です。



＜デザインコンセプト＞

シンボルマークは「羅針盤」をモチーフとしています。教育、科学技術・学術、スポーツ、文化の振興を通じて、希望に満ちた未来を目指す、文部科学省の役割を表しています。上部の円は進むべき方向を象徴し、その使命を見失うことなく、誠意と熱意をもって任務に専心する姿勢を示しています。下部の円の中央から放射状に広がる直線は、社会に開かれた文部科学省の姿勢を表現しています。同時に、親しみやすい簡潔なデザインからは、人、地球など、様々なイメージへと自由に連想を広げることができます。

色彩は日本人に古来なじまれてきた青色を基調として、「瑠璃（るり）色」と「空色」を使用しました。「瑠璃色」は強い意志、品格と知性、「空色」は誠意と未来への広がりを意味しています。

文部科学省では、平成20年1月の新庁舎移転までを、国民の皆様とのコミュニケーションを深めていくための集中強化期間と位置づけ、広報活動の充実に向けた取組を進めてきました。文部科学省シンボルマークの制定は、この一環です。

シンボルマークは新庁舎への移転と同時に、この1月から使用を開始しました。パンフレットやホームページ等の広報媒体、各種会議や行事における資料のほか、封筒、名刺など、文部科学省の業務に関連する様々な場面でシンボルマークを活用し、文部科学省の政策を多くの方々に知っていただくためのきっかけにしていきたいと考えています。

詳しくは以下のページからご覧ください。
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/19/10/07103005.htm

＜シンボルマークについてのお問い合わせ先＞
文部科学省大臣官房総務課広報室
TEL：03－5253－4111（内線2171）
E-mail：voice@mext.go.jp

事務連絡

庁舎の移転について

庶務・助成係　斉藤　健一

前号でもお知らせをしましたが、この1月より文部科学省は丸の内から虎の門の新庁舎へ移転しました。連絡先は以下のとおりですので、ご承知おきください。

≪移転後（平成20年1月4日より）≫
〒100－8959
東京都千代田区霞が関3－2－2
電　　話:03－5253－4111
夜間直通:03－6734－2440
ファクス:03－6734－3738
E-mail :ｋｏｋｕｋｙｏ＠ｍｅｘｔ．ｇｏ．ｊｐ
※変更は住所のみ。

なお、新庁舎における国際教育課執務室は東館8階になります。庁舎について詳しくは文部科学省ホームページをご参照ください。
http://www.mext.go.jp/submenu/07120607.htm

（文部科学省新庁舎）

［平成２０年度］在外教育施設派遣教員による巡回指導について

教職員給与係　増田　雄護

標記について、文部科学省では、昭和56年度から、別紙の「在外教育施設派遣教員による巡回指導実施要項」（昭和59年7月16日教育助成局長裁定）に基づき、巡回指導教員を決定し、本事業を実施することとしています。

ついては、巡回指導を計画している在外教育施設にあっては、巡回指導教員として適格な者を選考し、巡回指導実施計画書により、ご推薦願います。巡回指導実施計画書の内容を審査した上で、予算の範囲内において、必要と認められる巡回指導計画については、追って決定通知を発出します。

なお、巡回指導実施計画書の提出期限は平成20年5月30日、提出先は在外教育施設指導係です。

また、巡回指導教員に対し、予算の範囲内で、在外教育施設派遣教員旅費支給基準（昭和61年5月16日教育助成局長裁定）に定めるところにより旅費を支給します。

この巡回指導教員に対する旅費の支給は、本巡回指導実施後、当該教員の銀行口座（在勤基本手当の受取口座）に本邦から振り込むものとします。

つきましては、該当する校長にあっては、「巡回指導のための旅行実施行程表」を記入要領に留意して作成し、「外国送金振込依頼書」と併せて提出してください。

なお、巡回指導のための旅行実施行程表、外国送金振込依頼書の提出期限は「巡回指導実施後すみやかに」、提出先は教職員給与係です。

各手続きの詳細については、19文科初第1064号「平成20年度在外教育施設派遣教員による巡回指導について（依頼）」及び平成20年1月15日付け事務連絡をご参照ください。

人事異動について

庶務・助成係長　荒井　忠行

このたび、以下のとおり人事異動がありましたのでお知らせいたします。

（1月1日付け転入）
佐藤　仁美　　一橋大学
　　→　在外教育施設指導係

（1月20日付け転出）
臼田　亜紀子　在外教育施設指導係
　　→　高等教育局高等教育企画課
　　国際企画室調整係

（1月22日付け転入）
伊藤　拓郎　　新規採用
　　→　教職員派遣係

退任者挨拶

※肩書きは退任時のものです。

在外教育施設指導係　臼田　亜紀子

1月20日付けで高等教育局高等教育企画課国際企画室調整係に異動することとなりました。

国際教育課では、適応・日本語指導係で2年半、在外教育施設指導係で9ヶ月と、約3年3ヶ月の間仕事をさせていただきました。

適応・日本語指導係では、風雲急を告げる国内の外国人児童生徒教育に携わることができ、動いている教育行政を肌身に感じることができました。また、在外教育施設指導係では、校長先生たちと問題解決にあたる機会をいただき、現場から遠いと言われる職場にあっても、直接的に日本人学校と関係することができ、大変貴重な体験を積むことができました。

今度は、大学教育の国際化を進めるための仕事に従事することになります。分野は異なりますがこれまで学んだことを活かし、頑張っていきたいと考えています。

最後になりましたが、海外子女教育に携わる多くの皆様には大変お世話になりました。この場をお借りして心より御礼を申し上げます。

本当にありがとうございました。

新任者挨拶

在外教育施設指導係　佐藤　仁美

１月１日付けで在外教育施設指導係に配属となりました佐藤仁美と申します。昨年までは一橋大学で情報化推進に携わっておりました。国際教育との接点を探してみますと、大学の国際戦略事業に関わり、オーストラリアのモナッシュ大学で語学等を学んだことが思い起こされます。汗と涙の異文化間交流は、とても貴重な経験でした。この度の職務には、またその続きが始まるような期待でいっぱいです。新たな職務に気を引き締め、皆様のお役に立てるよう努力してまいりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

教職員派遣係　伊藤　拓郎

平成２０年１月２２日より教職員派遣係の事務補佐員となりました伊藤拓郎と申します。
国際教育課の職務は全てが目新しく、日々学ぶことが多いです。
４月１日より地方公務員の職務が待っている身の上のため、短期間の勤務ではありますが、少しでも皆様の仕事のお役に立てるように努力し、自身も何らかの成長や経験を得られるよう、真摯に取り組んでいく所存です。
どうぞよろしくお願いいたします。

編集後記

新しい年が始まり、はや1か月。文部科学省も庁舎移転をしたばかりの頃はバタバタとした雰囲気でしたが、だいぶ慣れてきて落ち着きを取り戻しつつあります。

新しい庁舎の執務室自体はそんなに広くなっていないのでしょうが、まだ机が書類に埋もれていないためか、なんとなく広く感じます。この状態を続けて行ければと思っております。

今回の「世界の窓」は、ナイロビ日本人学校の菊池国際交流ディレクターに執筆いただきました。

3年間、国際交流ディレクターとして子どもたちと向き合ってこられた、その思いを感じることができました。文部科学省という場所にいる自分の役割をしっかり果たし、国際交流、国際理解、そして子どもたちの成長に少しでも貢献したいと思いを新たにした次第です。

今後ともよろしくお願い申し上げます。

（1月号編集担当：在外教育施設指導係、庶務・助成係）

国際教育課「気球船」編集部

本誌へのご意見、ご感想をお待ちしています。下記までご連絡ください。

連絡先：E-mail:kokukyo@mext.go.jp

こちらも随時募集中です。

○投稿記事

（原稿料は出ません。ご了承ください。）

○新規配信依頼

○お願い○

- 本誌は、回覧、転送等して、多くの方でご覧ください。
- 特に断り書きのない記事については、転載は自由です。

---1月号の内容---

【世界の窓】――――――――――――――――――――1

○ 国際交流ディレクターの果たしてきた使命と今後の発展への思い

ナイロビ日本人学校国際交流ディレクター　菊池　弥生

【トピックス】――――――――――――――――――――3

○ 平成20年度国際教育課関連予算について

庶務・助成係長　荒井　忠行

○「文部科学省シンボルマーク」を新たに制定

大臣官房総務課広報室

【事務連絡】

○ 庁舎の移転について ----------5

庶務・助成係　斉藤　健一

○ [平成20年度]在外教育施設派遣教員による巡回指導について ---------5

教職員給与係　増田　雄護

○ 人事異動のお知らせ ----------6

庶務・助成係長　荒井　忠行

○ 退任者挨拶 ----------6

○ 新任者挨拶 ----------6

【巻末資料】

○ 平成20年度文部科学省国際教育課関係予算額（案）一覧